No.16
２０１４・５

ホーモイ通信

高齢社会をよくする下関女性の会
（ホーモイ）
代表　田中隆子
TEL/FAX 083-253-4892
URL：http://www.yg-life.net/homoj/

無我夢中で活動して参りました１０年。過ぎ去ってみて、初めてやり遂げたことの意味の大きさを受け止めることができますが、それもこれも会員はじめ多くの方々のお支え、ご協力あってのことと、あらためて感謝申し上げます。

１０周年記念事業として「１０年のあゆみ」、2013年9月28日（土）に梅光学院大学スタージェスホールで「記念フォーラム」、「祝賀会」を開催しました。

これからも次の１０年に向けて着実な歩みを展開して参りますのでよろしくお願いいたします。

講演1　いずれみんなおひとりさま

講師　上野千鶴子氏　認定NPO法人ウイメンズアクションネットワーク(WAN)理事長

「おひとりさま」の上野千鶴子でございます。高齢社会をよくする下関女性の会、１０周年おめでとうございます。

私は、今年６５歳になりました。順調に加齢して次第に死が目の前に近づいてきました。近頃、同世代や私より若い友人の訃報を聞きますと、本当に胸が詰まります。私の次の本のタイトルは決まっていまして、『おひとりさまの最期』。その次の本は『おひとりさまの死後』です。

おひとりさまはどんどん数が増えています。日本は否応なく人口減少時代を迎えています。

最近、私は、「在宅ひとり死のすすめ」をとなえています。元々『おひとりさまの老後』は、年寄りが一人で住んでいるだけで「お寂しいでしょう」と言われるのを、大きなお世話だと言いたいから書いたものです。年寄りが家でひとりで死んでも、「孤独死」と言われたくない。実際には、老いの過程で周囲からお世話を受けていますから孤独ではありません。自分の死体すら、自分では始末できないのです。

先日、都内で「在宅ひとり死準備セミナー」を実施しました。そこで投げた同じ質問をします。

質問１、死ぬ時に誰かに手を握っていてほしいですか？

質問２、自分の死の床を子どもや孫に取り囲んでいてほしいですか？

おお、皆さん圧倒的にノーが多いですね。

◆在宅看取りの可能性

これまで、おひとりさまの最期はみじめでした。施設の大部屋か病院で死ぬしかない。最近、私は在宅看取りに関わっておられる専門家を訪ねて取材をしています。今のところ、在宅看取りは、家族がいること、愛も介護力もある家族が同意してくれた時だけ成り立ちます。では、家族のない者には、在宅の選択肢はないのか。『上野千鶴子が聞く、小笠原先生、ひとりで家で死ねますか？』は新しい私の本の一つですが、ドクターに、「ガンの末期でもOKですか？痛みのコントロールは？単身世帯でも大丈夫ですか？」と食い下がり、「大丈夫です」と。「認知症になっても大丈夫ですか？別居家族との関係は？お金はいくら必要ですか？」と聞くと、「お金はべらぼうにはかかりません」との答えでした。

◆在宅看取りの実践

今、私は、在宅看取りを実践しておられる医療者に、往診同行調査をしています。独居で、死を前にした人の所です。そこで学んだ教訓は、在宅ひとり死は次の３点があればイエス！です。２４時間巡回訪問介護と２４時間対応の訪問医療と訪問看護です。この中で一番大事なことは、介護、すなわち食事・排泄・入浴介護です。死の前日まで自宅のお風呂に入れて、翌日お送りすることもできる。家で死ぬための条件とは、強い本人の意思・愛と介護力のある家族・もう少しのお金です。

岐阜市在住小笠原ドクターは、実は、年寄りの貯金額を聞きだす名人です。認知症の90代のおばあちゃんは、300万円持っておられました。訃報を聞いた私の第一問は、「おばあちゃんのお金に手をつけられましたか？」「はい、でも半分残りました。末期３カ月、夜間に入ってもらった家政婦さんに使いました。遺族の甥御さんが許可を下さいました。」私は、あきれました、相続権者の同意が要るとは。日本は家族の権利が非常に強

いので、お金を持っていても使えない可能性もあります。

各地でこういう独居の看取りが行われてきています。杉並区の松村ドクターや、在宅ホスピスのパイオニア、小平市の山崎ドクターの実践もすばらしい。２０年前から在宅医療をしておられる川越ドクターは生活保護受給率の高い墨田区で、四畳半、風呂もない木賃アパートの末期がんの患者を支えています。

限界集落はどうでしょうか。山間急傾斜地の立派な家に住む９０代のおばあちゃん、足が悪く交通弱者、買物弱者ですが、地域に残っている５世帯の方々が、買物を手伝っています。日本の家はバリアだらけですが、いざって歩けば何でもできると、お風呂もトイレも自分でできます。

医療介護過疎地帯では？と思って訪ねた新宿どまん中に、退院移行した在宅の患者を往診で支えるという往診専門のクリニックもありました。

地方は今、人口減少社会です。ホームホスピスを事業化した「かあさんの家宮崎」では、空いた家を借り上げ、部屋割りして５人のお年寄りが住み、訪問介護と夜間見守りをつけています。そこに、訪問看護と訪問医療をつけて、月額１５万円で最後まで看取りをしています。この事業を始めた市原美穂さんは、末期には医療の介入が必要だと、宮崎市で過去１０年間に訪問看護ステーションを増やしてこられ、２２になりました。宮崎市内で亡くなられる方は、誰でも在宅で看取っていただけますと言われています。死ぬなら宮崎でと、実際に横浜から来られた７０代の男性、余命３カ月だったはずが一年半暮らして亡くなられました。さて、大丈夫ですか、下関は？

在宅看取りのよさは、本人が穏やかな死を迎えられることです。家は、ただの空間ではなく、身体の延長であり、思い出の蓄積した場所です。そこから離れたくないのは年寄りの悲願だと思います。事業者の方は、そろそろ死が近いかなと思ったら、離れて暮らしている家族に喪服を持ってお越しくださいと連絡し、親の枕元で添い寝をして見送ると心から感謝されるとおっしゃいます。すばらしい実践です。離れていても安心というのは、親の幸せであるだけでなく、子の幸せでもあります。

◆在宅看取りのシステム作りの必要性

看取り士養成をしておられる島根県の柴田久美子さんは、エンゼルさんチームを作っています。地方でさえ、赤の他人がボランティアとして看取りに入る時代になりました。

このように多職種連携の仕組みがあれば、在宅で死ねる。医療と介護の両方に目配りのできるマネジャーの育成が必要です。その人についての情報を専門家のチームが共有して、相互に監視するというしくみ（私はトータル・ライフ・マネジメントとよんでいます）ができたらと思います。

システム作りがなぜ大事かと言うと、カリスマ的なリーダーや志の高い医者、あるいは自分の職分を乗り越えてまで深いコミットをするケアマネやヘルパーがおられるところでしか、在宅ひとり死は可能ではないのが現状ですが、特別な人のいる特別な地域でなくても、誰にでも手が届く仕組みになってほしいからです。こういうシステムが介護保険の中でできることが必要ですが、ただし金がかかる。

在宅死が、おひとりさまの選択肢になってきましたが、抵抗勢力は家族です。家から出ていってほしい同居家族、あるいはひとりで置いとけないという別居家族。この家族が病院送りや施設入居の決定者になります。もう1つは、病院しか知らない医者。こんな重篤な患者を家に帰せないと言います。もう１つは、地域差です。地方では施設を作りすぎて、在宅おひとりさまが増えません。

最後にあと少しのお金の問題ですが、日本のお年寄りは小金持ちです。不動産を所有している率も高い。高額医療費減免制度もあり、低負担で高度の医療を受けられます。自分のお金を自分が生きている間に生き金として使うことができれば、在宅でひとりでいることができます。

介護保険は原則、年寄りがひとりで生きて死ぬように作っていってほしい。介護保険の見直しのたびに、高齢社会をよくする女性の会は、「おひとりさま仕様に」と、厚労省に要望書を出してきました。しかし、介護保険は改悪に次ぐ改悪。どんどん使い勝手が悪くなっています。また、原資がないので、国民負担を増やそうということで、消費税増税が決まりました。民主党政権は、全額社会保障目的に使うと約束しましたが、この政権のクビが吹っ飛びました。現政権は増税分を、建設国債の償還や、法人税減税分の相殺に充てると言っています。これから先、この政権が続く間は、私たちの老後の安心は、希望がないでしょう。どうしましょう、この私に希望を与えて下さい。樋口恵子さん、お願いいたします。

（中野直子）

講演2

大介護時代を生きる

講師　樋口恵子氏　NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長

◆介護保険の誕生

上野さんは、"一人でも死ねるための条件"ということをお話くださいました。私は年齢は逆ですが、介護する側から、最近「大介護時代」という言葉を唱えております。カラスが鳴かない日はあっても、「介護」という言葉を聞かない日はありません。25年くらい前、在宅介護の事前調査をした際、「お宅で、主に介護をしていらっしゃるのは誰ですか？」と聞くと、「え、介護？」と、介護という言葉が通じなかったのです。

昭和62年に「社会福祉士法及び介護福祉士法」という国家資格の制度ができ、急に全国に介護福祉士養成専門学校などが開校され、「介護」は業界用語としては定着しました。しかし、日常会話には出なかったのです。日常会話でここまで定着したのは、介護保険大論争のときからです。介護保険大論争では、「すぐ介護保険を使うようでは、日本の家族の美風が廃れる」「嫁がやってきたものだ」などと大変批判されました。

思えば、介護は"看護、看病、看取り"などと言われ、宮尾登美子さんの「一弦の琴」に、どんなに気丈なお年寄りでも60日は下の世話になったとあります。「末60日」ですよ。今は3，４年から10年で一つのピークがあって、重厚長大化し、重く、長く、大きく、多様化しました。それが、家族や介護者の人生に重大な影響を与え、家族のあり方自身を壊すまでにいたったとき、ようやく介護保険（社会的介護）が動き出し、この長期に弱った高齢者を支える営みに、人は、時代は、「介護」という言葉を与えたのです。発足して13年、何よりも家族が変容したことによって、ますます社会的介護の存在が大きくなったというのが、「介護保険第一幕」であります。

「序幕」は、介護は"女が背負って当たり前"で、社会的に「見えない」存在だった時代。夜明け前が一番暗いというけれど、本当にこの間の女たちは暗かったですね。

1980年代の末、介護保険論議の少し前、全国に広がったのが「孝行嫁さん表彰」でした。なぜか、娘や妻ではなくて、嫁だったのです。戦後の憲法改正とともに、民法も改正されたのですが、当時の為政者の認識が戦前のまま受け継がれたのか、お墓の継承と高齢者の看取りに関しては、明治民法のままの地域が多かったと思います。それを崩したのはやはり介護保険でした。介護保険をつくったのは、国が新たな財源を調達するためだったのですが、一方で介護の社会化という理念が、国民の願いと一致したからこそ、ある意味で幸福な船出ができたと言っていいと思います。

しかし、これも最後まで反対の声は強く、私たちNPOはじめ推進派は大変苦労をしました。最後に味方してくださったのは、かつて私が"草の根封建オヤジ"と怒っていた全国の市町村長会、議長会の皆様でした。ほとんど中高年男性で、最初は介護保険に反対でした。しかし、お膝元の家庭を見れば住民の要求だと分かり、重い腰を上げて介護保険賛成のゴーサインが出されたのです。そこに政府内から「6ヶ月凍結！」の声が上がり、「それは地方分権に対する中央の抑圧だ」と、審議会で"抗議文"を出すことになりました。結局、「市町村からの意見が揃って、介護保険法も成立し、船出しようという矢先に政権政党から異論が出るとは、誠に遺憾であります」と、穏やかな意見表明になりましたが、日本の政策方針決定の中で非常に稀なことだったと思います。しかし、以後スムーズにいったのは、やはり自治体が皆一生懸命になったからだと思います。

暗くて見え難かった介護や要介護高齢者の実態が見晴るかされて、紆余曲折を経てここまで来ましたが、暴力の存在が明らかになったこと、認知症がきちんと認識されるようになったことなど、いろいろ良い面もあります。

◆大介護時代

そして今、第２幕は「大介護時代」であります。なぜ"大"の字をつけるのか。

第一の意味は、何と言っても長寿になり、必要とする社会的介護量が膨れ上がるからです。厚労省の計算では10年後に２倍弱、私は４倍くらいになるだろうと思います。

私は只今81歳。病気もし、足腰も弱くなりました。去年は小康を得て、冨安先生も御一緒に、平均年齢77歳の5人でスウェーデンに視察にまいりましたが、やはり大変でした。"立てばよろめき、座ればため息、歩く姿はボケの花—"(大笑い)。これからそういう人が急激に増えるのです。厚労省の試算によれば、生涯の医療費の半分は70歳以降に遣うということです。生命の自然として、年取ればメンテナンスに金がかかり(笑い)、介護量もそれだけ増えるわけです。

私も77歳で人工血管を入れる大手術をし、手術代だけで500万円掛かりましたが、高額医療費補助制度のお陰で、15万円程度で済んだのです。私は本当に泣きました。なんと医療保険制度の恩恵に浴していることか…。世界に冠たる社会保険制度を誇りにして、何としても、知恵を出し合って守っていかなくてはと思いました。

今年は、社会保障制度改革国民会議が8月までに報告書を出し、制度が大きく変わろうとしています。医療費や介護保険料の負担率や特養の入居条件なども厳しくなるようですが、低所得層の負担は軽減される可能性があります。

もう一つの"大"の意味は、介護を支えてきた家族の急激な変容です。介護保険導入から13年の間に、少子化非婚化が進み、下の世代の数が減少したのです。

介護保険論議のころ、私などは介護を担う最年長者(60代)の嫁代表として発言したようなところがあります、「なんで長男の嫁だけが!」と。私たち昭和一桁後半(7,8年〜10年ころ)生まれの世代の合計特殊出生率(女性一人当たりの出産数)は5.11でした。私が通った東京山の手の小学校でも、兄弟の数は、6,7人から8人ぐらいの人も少なくありませんでした。ですから、私の世代は介護嫁はそんなに居なかったのです。介護は郷里の長男の嫁に任せて、次、三男の嫁などは割に楽でした。舅や姑が倒れると、流行の服など着て、「お母様、お具合いかがです?」(笑い)などと言って来るものだから、すっかり気に入られて…。"長男の嫁症候群"というのが長く長く続いたのです。これもそろそろ終焉を迎えます(笑い)。兄弟の数が減ったからです。今年の合計特殊出生率は、1.31から1.37になるか1.41になるか、小数点2位の所で目を凝らしています。

少子化が顕著だった昭和25年から35年の10年間、合計特殊出生率は3.7から、昭和35年皇太子殿下ご誕生の年には2.00をマークしたのです。急に親2人に子も2人になって、日本型の父系優先血統主義の家制度(長男が跡を取り、家の面倒を見る)は保てなくなり、昭和55年から60年生まれにかけて独身率が増え、50歳での未婚者(生涯未婚)は、男20%、女11%に達しました。

今、高齢者世帯の最大多数は"おふたりさま老夫婦"で、次が"おひとりさま"。問題は第3位で、"三世代家族"が逆転して何がきたと思います?"老いた親と独身の子ども"(笑い)です。わが家も同じで、結構流行の先端をいっとるなと…。

私も二度結婚し(大笑い)、子どもも一人産み、娘も30過ぎまで縁談がありましたが結局実らない。パラサイトシングル(寄生型)と言われる方もおられましょうが、大抵の未婚の子どもは外で真面目に一生懸命稼いでいます。しかし、昼間は居ないのです。"おふたりさま"も老老介護や認認介護、ましてや"おひとりさま"。昼間介護の手がない人が、合計すると高齢世帯の75%近くなるような家族の在りようを、反面寂しいなーと思います。私も娘に手を握って貰おうかなーと(大笑い)、旧いと言われそうな感情も無視できません。何はともあれ、社会が持続可能なのは、人は皆家族の中に生まれ育てられるからです。大介護時代は、介護を人々と分かち合いながら、全ての人が人生のどこかにケアを組み込んでいく時代です。それは今ある家族だけでは足りません。ケアを通して人々が力を重ね合い、つながりをつくる。介護と仕事を両立させ、社会的介護を広げ、志や人間関係のバランスを保ちながら、新しい生き方を考えなくてはなりません。　(大呑芳子)

鼎談

人生100年いくつになっても学ぶ幸せ"幸齢社会"

登壇者：樋口恵子氏・冨安兆子氏・上野千鶴子氏

■家族の変容と介護

冨安／ 今日は、山口県下はもとより、福岡県からも多数ご参加いただき、ありがとうございます。超高齢社会を「幸せな高齢社会」にするために、私たちに何ができるのか、ご一緒に考える場になればと思っています。

樋口／ 何が幸せか、人によるとは言え、時代に応じた様々な意識の変化が必要で、意識はまた制度とともに変わっていきます。介護保険13年の間に、家族介護の形が急変し、血縁化、男性化しました。嫁中心だった介護は、夫の親は夫の身内、妻の親は妻の身内が主になり、2010年から介護者の男性比率は30%を超えました。

これからの社会のビジョンは「ワーク・ライフ・ケア・バランス」で、仕事と生活と介護（子育ても）をバランス良く保っていくことです。男が変わって初めて日本の社会は変わると思います。この間、18人の賛同者（上野千鶴子さんも）で、厚生労働大臣に「介護離職ゼロを目指すための要望書」を出しました。介護で仕事を止めずに済むように、地域と職場の双方が理解し、総力戦でいくための要望書です。

上野／ 樋口さんは、身体看護から金銭面まで含めた「成年後見」が必要だと言われましたが、私の「トータル・ライフ・マネジメント」もそれに近くて、暮らし全般にわたるお世話を、その人に合わせた専門家と、友人や家族とのチームケアでつくるアイディアです。もう一つ、「高額医療費減免制度」。これに対応する介護保険上の補助制度として、終末期の「短期集中高額ケア費用の減免制度」がほしい。支払える人は支払い、支払えない人は資産で死後清算、それも無理な人にだけ公的補助金をつけて、全体として介護・医療総額の社会保障費用を抑制できると思います。ここは是非、共著の「小笠原先生、ひとりで家で死ねますか？」を読んでいただきたいところですが、定時巡回随時対応型、1回に20分以内の滞在というモデル事業が選択肢の一つになれば、独居の看取りも可能です。

樋口／ ただ、自宅で最期を希望するのは、男60%に対して女は30%です。在宅は、誰か傍にいることを前提にしており、夫を見送った妻は、一人では死ねないと思っているのです。献身的な医者と、犠牲的精神に富んだ訪問看護師だけでは広がらない。新しい成年後見制度と、それをマネジメントする人がまず必要です。

上野／ 在宅で夫を見送った妻が「『私は仕方がないから、病院や施設に行こうと考えるか、『夫にできたんだから、私にもできる』と考えるか、どちらでしょうか？」と聞きましたら、この選択肢は半々ぐらいだと思います。家族が居なくても在宅介護ができるようになれば、女性の在宅ひとり死も可能です。

冨安／ 今や、女性たちが仕事につくのは当然の社会になっていますから、地域でのケアのためには、一定の年齢まで働いて来て労働市場から退出した人たち、自由な時間を持ち、自分なりの生活を保障できる年金などを持っている人たちで、シフトを組んでいくのがさしあたって可能な形かなと思うのですが…。さて、この辺で今日のテーマに戻りたいと思います。

人生100年時代、先日の「敬老の日」の新聞報道によりますと、100歳以上は、今年最多で54,397人。43年連続の増加で、1位島根、2位高知、3位が山口県です。

一方介護嫁は絶滅危惧種、人類も絶滅危惧種になりかねず、放射能の問題などもゆるがせにできません。情報収集し、多角的に学ばないと生き抜いていけない時代です。

■人生いくつになっても学ぶ幸せ"幸齢社会"

上野／ 私は学ぶことが仕事で、学び続けてきました。自分のための学びが、皆様にも役立つという信念でやってきたのが、ケアの研究であり、家父長の研究です。

樋口／ 人生50年時代から100年時代になり、学ぶ種は山ほどあります。今、関心を持っているのは、冨安さんが言われた100歳。100歳以上の高齢者の87%、約９割は女性です。しかし、90代以上の女性の健康は、悔しいけれど、男性の方が良いのです。女性が社会的に活躍する場に恵まれなかった所為もあるでしょうが…。

この研究を慶応大学の廣瀬先生という方がしておられ、弟子入りしてきちんと学びたいと思って、もうアポを取っているんです。（拍手）

以前アメリカで、「高齢女性の健康は社会の資源である」というバッヂをつけた老女達に会いました。生き残った高齢の女性が元気であるためには、予算を少し振り向けてもいいと思うのです。女は子どもを産む役割を果たすわけですから。勉強して、女が100まで生きても社会の損失にならないように頑張りま～す。

（大拍手）

冨安／ 頑張って、車いすででも出かけようという気力が必要ですね。樋口先生が言われたように、口に出せばそうせざるをえなくなる。先生がお腹の動脈瘤を3つも取られて、もうダメだと思ったらそこでおしまいだったんでしょうが、あっちでも来て欲しい、こっちでも来て欲しいと声が掛かると、何とかして行かなければと…。結果的に不死鳥のごとくお元気になられました。

上野／ ボケても半身麻痺になっても、寝たきりになっても、安心して生きられる社会を目指すのが「幸せな高齢社会」ですよね。

冨安／ 歳をとると体力も気力も衰えるのは自然の流れですが、私はできることなら立ったまま死にたいと思っているんです。いろんな事があっても、それなりに生きていくには、哲学が必要なんじゃないでしょうか。

樋口／ 私は多くの事に失望していますが、絶望はしません。

1989年、初めて高齢者対策のゴールドプランが出来た頃、「認知症」は"ボケ""痴呆症"などと呼ばれ、「心がけが悪いからボケる」とか「血筋だ」とか、「うつる」と言う人も居ました。私は、認知症専用のデイサービスを街に残すために、一生懸命「どなたでもなるのです」と言っても反発され、どうしようもありませんでした。更に「嫁が世話をし過ぎるからボケる」「看病のしかたが悪いから」などと言われた時代を通り過ぎて、今はどうでしょう。オレンジリボンをもらうための認知症サポーターが、アッという間に300万500万。去年政府は、「オレンジプラン」（認知症対策）を作り、２，３日前には、厚労省や消費者庁など11の省庁が集まって、認知症の具体的な政策が打ち出されました。認知症になっても安心できるまちづくりに向けて、国民の意識は大きく変わってきました。

少し前、認知症問題の草分けである長谷川和夫先生が、シンポジウムで基調講演をされ、90歳近く、涙もろくなられたのか、「ここ10年程の認知症の人に対する認識の変化を思うと」と絶句され、「私は世の中の進歩というものを信じたい」と述べられました。私の心情もそれに近い…。（拍手）

上野／ 私も65歳になり、気がつけば、「こんな世の中に誰がした」と詰め寄られる側におります。国土を放射能で汚染した責任は、私にもあります。止められなかったからです。本当に日本の女性の状況が良くなったかと考えると、自分の非力さ、無力さに、お詫びしてもし足りない、打ちのめされた気分になります。

もし樋口さんに弔辞を述べることがあれば、「『高齢社会をよくする女性の会』を率いて、日本に介護保険をもたらしたその功績は、永く歴史に金字塔として残るでありましょう」と言うでしょう。こういう先輩方に励まされ、叱咤激励されてここにいる幸せをかみしめております。有難うございました。

（拍手）

冨安／ 上野語録には、男性への厳しいコメントがあるにもかかわらず、男性のかくれファンが沢山おられます。最近は「お婆さんキラー」と称されるくらい、年配の女性のファンが拡大しているわけがご理解いただけたかと思います。

冒頭の主催者挨拶で、「ホーモイ」代表の田中さんが、皆さんに「活動の仲間に入ってください」と言われました。ご一緒に、より幸せな高齢社会のためにご努力いただければ幸いです。（大呑芳子）